

あらたな「物語」の誕生を

川上 蓉子

昨春秋、米国発の金融危機は、息つく暇もないほどの早さで世界を席卷した。ゲーム化された金融資本主義の危険性は以前から語られてはいたけれど、これほどの激変を誰が予測できただろうか。経済と情報のグローバル化は、人間の思考を越えて現実の物語はるかにダイナミックである。振り返れば、〇八年に誕生した「創作」の作品群は、「百年に一度」ともいわれる混乱を迎えた〇九年の直前の一年間に紡がれたものだというのである。濃淡の差はあれ、矛盾の深まりを作品のどこかで反映していたに違いない……そんな仮説を立てて私は読んだ。時代が大きく動く時、「人間の真価を問う直すチャンスでもある」と目見庸は語っていた。児童文学も含めて文学が時代を映し出すとすれば、物語はどこに向かうのだろうか。誤解を恐れずにいえ

ば、新しい「物語」の誕生は、ダイナミックに動く現実の物語から生み出されるはずだし、それは若い世代の感性に委ねる以外にないと思っている。困難な時代を俯瞰するような新たな物語の誕生を期待したい。

最初はベテラン岡田淳の『フングリコングリ』（偕成社）を。「図工室のお話し会」と副題にあるように、図工室にやってきたチョウチョや、金魚、カエルなどに語りかけたちょっと不思議なお話を六話納めた短編集。学校を舞台にししながら、約束事や規則に縛られた学校から飛び出した自由さが楽しい岡田ワールドは健在。

〇八年もスポーツを題材にした作品が目をついた。工藤純子の『ピンポンはねる』（ポプラ社）は、五年生の若菜が友達とちょっと仲良しになるために始めた卓球。卓球そのものの面白さに目覚めていくなかで、新しい出会いや友情を見つけていく。濱野京子の『フュージョン』（講談社）は、二本の縄で跳ぶダブルダッチという縄跳びの競技。これに夢中になる四人の少女たちは中学二年生。それは縄跳びに魅せられなければあり得ないような個性的な少女たちの出会いであり、新たな発見の日常を重ねていくことでもあった。中学生という不定型な今が、ダブルダッチの風に乗って生き生きと語られている。直木賞受賞第一作となった森絵都『ラン』（理論社）も、マラソン「走る」ことを通底させている。一三歳で父母、弟を交通事故で失った夏日